

もう10年、まだ10年

大塚 香 (旧姓 舟橋)
(1998年度修了 国土交通省 中部地方整備局 名古屋港湾空港技術調査事務所)

大学を修了後、運輸省第五港湾建設局(現 国土交通省中部地方整備局)に入省して、ちょうど10年が経ちました。毎日が勉強で、あっという間に過ぎた気もしますが、とても充実した10年でした。

私が学生時代での中で最も充実した時間を過ごしたのは、ゼミであり、研究室でした。私が所属した青木研究室では、現地測量や波浪観測など、研究室にこもってはいらない“現場”の様子を肌で実感することができました。また、私が今の職場を選んだきっかけも“現場”でした。三河湾の水質調査を行った際に船を出してくれたのが、現在私が勤めている中部地方整備局の事務所のひとつで、豊橋市神野ふ頭にある三河港湾事務所でした。船長さんたちと話をするうちに、“港をつくる”という仕事に興味が湧いてきました。

「港をつくる」ということ

実際に入省してみると、“港をつくる”ことは学生時代に聞いていた以上に、幅広く奥深い仕事でした。“港をつくる”ためには、まずは、地域にとってどのような“港”が必要なのか、安全性、経済性、環境面などあらゆる角度から様々な調査・検討を行います。その後、港全体の形や防波堤など施設の形状を決め、各施設の設計、工事と行われていきます。

このように、「港をつくる」ということは、工事に至るまでの計画・調査・検討・設計なども非常に重要です。私は、これまでに清水港や三河港、名古屋港、四日市港などの計画に携わってきました。自分の携わっている仕事の重要性を理解すると、その重みを感じるとともに、やりがいも感じます。

「港を考える」ということ

国が進めている“伊勢湾スーパー中枢港湾プロジェクト(伊勢湾(名古屋港+四日市港)で安くて早くて質の良いサービスを提供し、近隣アジアの港に負けない港をつくるという取り組み)”があります。この担当になった時、今まで自分が港湾を“点”で見ていたことに気付きました。「港を考える」ということは、工場と港湾を結ぶ道路や鉄道なども視野に入れること、そして国内だけでなく海外も視野に入れることが必要であることに気付きました。世界から見てどのような港に魅力があるのか、船はどのような港を利用したいのか、常に考え続けたことで、私の「港」に対する概念を大きく広げた仕事となりました。

港湾の仕事に限らず、「ものをつくる」という分野においては、広い視野をもって取り組むことが大切だと思います。

高専では建築を専攻していた私が、港湾という土木系の道を歩んでいるのも、大学で建設工学という建築・土木・環境など幅広く学び、視野が広がったからかもしれません。これからも多くのことを吸収し、たくさんの人に喜ばれる「港」をつくっていきたいと思います。



写真：現在の名古屋港